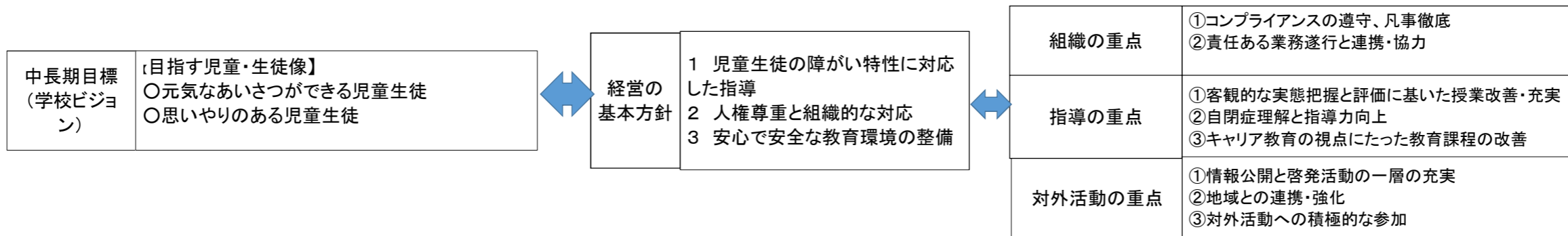


平成28年度 学校自己評価表(最終評価)

<学校目標>

～18歳で自立できる人間を育てる～

鳥取県立米子養護学校



教科等あわせた指導の充実

キャリア教育の
推進と専門性向

自閉症スキルアップ事業

目指せパラリンピック

一人一人が活躍できる場の創造

学部	評価項目	目標（年度末の目指す姿）	中間評価	最終評価		
				達成状況	評価	来年度に向けての改善方策
各学部	一人一人に合わせた指導	(児童) ○基本的生活習慣の定着 ○人と関わる力の育成 ○体力向上 (教員) ○実態把握に基づいた指導内容や支援方法について情報共有が図られ、学年や学習グループごとに適切な対応ができてい ○授業改善の意識が高まり、児童につけたい力を意識した活発な授業づくりの取り組みができてい ○授業改善の意識が高まり、児童につけたい力を意識した活発な授業づくりの取り組みができてい ○授業改善の意識が高まり、児童につけたい力を意識した活発な授業づくりの取り組みができてい ○授業改善の意識が高まり、児童につけたい力を意識した活発な授業づくりの取り組みができてい	C◎ ○実態把握シートを用いて複数教員による見直しや、学年・学習グループごとに指導内容や支援方法について情報交換することで、児童につけたい力を意識してよりねらいに迫った手だて等を話し合うことができた。 ○学部研究をもとに児童につけたい力を意識した授業改善の意識は高まっている。それぞれの授業にも意識を高め、授業途中での見直しや改善の話し合いの深まりが必要である。	A	○学年や学習グループごとに、児童につけたい力を意識した学習内容の確認や、指導や支援の共有と改善に向けた情報交換を図る機会を設定する。 ○学年主任やチーフの役割や責任を明確にして、主任やチーフを中心とした見通しをもった適切な提案や活発な話し合いを行い、より適切な指導や支援による授業づくりを進める。学年団、学習グループ、学部の企画部会等で振り返りや改善に取り組む。	
		(生徒) ○生活自立の確立 ○表現力の育成 ○体力向上 (教員) ○チェックリストを活用しながら実態把握を行い、生徒一人一人の課題が明確化されている。 ○生徒一人一人の課題を共通理解し、その課題を意識した授業作りが行われている。	C ○よりの確な実態把握を行うために作業学習でつけたい力チェックリストを作成し、作業学習での活用に努めた。他の教科等については、それぞれの教科・領域のチェックリストや複数の教員での行動観察等での実態把握を行い、指導・支援に役立てた。 ○学内や他学部の授業を見合うことで、指導・支援の工夫などを参考に、授業の改善に役立てることができた。 ○単元毎につけたい力を一覧表にまとめ提案していくことは難しかったが、常にグループ内で個々につけたい力について話し合いながら授業内容の検討を行ってきた。	B	○チェックリストのより効果的な活用の仕方について検討し、授業改善に役立てる。学部アンケートで評価をする。 ○学内や他学部の授業を早めに計画し、参観する機会を設ける。 ○グループリーダーとなる教員を増やすことができるような体制作り（小グループリーダー、学部分掌組織の明確化、新転任者がリーダーの場合はサブリーダーの補佐等）に努める。	

	高等部	の充実	<p>(生徒)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○基本的な生活力の確立 ○主体的に行動する力の確立 ○表現力の向上 ○体力増進、心身の健康 ○自己肯定感の向上 <p>(教員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○客観的なアセスメント方法の確立と活用が行われている。 ○客観的な実態把握に基づいた個の目標設定と指導、支援方法の情報共有と実践が行われている。 ○生徒が楽しみながら、主体的に活動できる表現活動、体づくり等の授業の工夫、改善が行われている。 ○地域・社会とのつながり、発信を意識した教育活動が行われている。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ○アセスメントシートを利用した客観的なアセスメントを実施し、作業学習を中心に学習に活用することができた。また、複数の教員による行動観察での実態把握、卒後を見据えた指導・支援方法の検討、共有ができた。スピード感をもって、学年、学部単位で生徒指導・支援にあたり、報告、連絡、相談、確認体制が確立できた。 ○「表現活動」においては、受身ではなく、生徒たち自らが課題を見つけ、自分たちで考え相談しながら活動をする姿が少しずつ見られた。生徒自らが「歌いたい」「演技したい」という意欲を持って取り組めた。「体づくり」は、継続して取り組むことができ、身体を動かす習慣がついてきた。しかし、「主体的に」取り組むまでには至っていない。 ○地域とつながる教育活動は、学年、作業学習、委員会等で地域の清掃活動、花の植え付け作業等を行った。校外での神楽発表、陸上大会参加等、積極的に地域への発信を行った。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○「主体的に」活動できる生徒を育てるために、授業づくりの工夫、改善を図る。生徒が「主体的に」活動に取り組むために、各コースの具体的な目指す姿(例：人の意見を聞き、自分の意見をしっかりと伝える)、各授業での目指す姿を教職員がしっかりと話し合い、共通理解する。その上で、学習活動を工夫、改善を進める。具体的な「目指す姿」を学期ごとに評価する。 ○地域とのつながりを意識した活動を継続して実施し、県米、県米生徒をアピールし、生徒の活躍の場を広げる。そのために、年度当初に、地域とのつながりを意識した活動計画を立て、実施する。
キャリア部	キャリア教育	キャリア教育の推進	<ul style="list-style-type: none"> ○ワークキャリアとライフキャリアの違いについて、8割以上の教員が理解して実践を行っている。 ○キャリア教育全体計画及び、「5つの力」が校内に周知されており、個別の支援計画や個別の指導計画作成の際に活用されている。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ○「ワークキャリア」と「ライフキャリア」について、全体研修を行った。「キャリア」についての理解は深まったが「ワークキャリア」と「ライフキャリア」についての理解は職員間で様々であるため、研修等でさらに理解を深めたい。 ○キャリア教育全体計画、「5つの力(単一・重複版)アセスメントシート」を作成、提案し各学部で活用について研修を実施した。 ○教務部と連携して「5つの力」と個別の支援計画及び、個別の指導計画を関連させることができた。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ○実際に活用した意見を把握し、「5つの力」「5つの力アセスメントシート」のさらなる見直しを行い、改善を図る。 ○研究・研修部と連携して「5つの力」を活用した実践を、各学部で推進する。
	進路指導		<ul style="list-style-type: none"> ○本校の進路指導の考え方や基本的な福祉サービスについて理解し、説明することができている。 ○本人、保護者のニーズを具体的に把握し、個に合った進路情報の提供が行われている。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ○職員研修を学部ごとに実施することで、ニーズに応じた内容の研修を実施することができた。しかし、教員の進路に関する知識や理解は十分とはいえないため研修内容や方法の見直しも必要である。 ○保護者に向けて進路研修を実施したり、進路だよりを発行したりすることで定期的に進路に関する情報を提供することができた。しかし、進路研修の回数や時期、内容等については課題も残るため検討も必要である。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○小・中学部や高等部のコースごとの進路に関する知りたい情報を的確に把握するための方法を検討し実施する。また、その結果を踏まえて研修を行う。 ○保護者のニーズに応じた研修が実施できるように、研修の回数、時期、内容の見直しをする。
	教務部		<ul style="list-style-type: none"> ○県米で育てたい力をもとにした「個別の指導計画」の様式の見直しが進んでいる。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○キャリア教育の提案する「5つの力」を授業に生かすために、また価値ある目標設定や次につながる評価をしていくために「個別の指導計画」の内容、形式を見直した。それに伴い「個別の教育支援計画」等を含め「通知表」として電子ファイル化し、各データを個別に一つのファイルにまとめた。活用しやすいようにマニュアルが自動表示される等の工夫をした。そして、この新しい「個別の指導計画」の形式で次年度案を作成するための研修を実施した。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ○「個別の指導計画」を含め、新しい「通知表」を実際に活用してみて、不具合を解消したり、更に活用しやすい形式にしたりする。
	教科等合わせた指導		<ul style="list-style-type: none"> ○系統的な指導・支援に取り組むことで、個々の将来像を見据えた授業実践を行うことができていく。 ○各教科・領域、自立活動との連携を図ることで、児童・生徒がより主体的に活動できる学習活動を設定することができる。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ○小・中・高のつながりを意識した授業作り、を行うために、「日常生活の指導」「生活単元学習・生活課題学習」「作業学習」それぞれで『つきたい力』『指導の重点』を作成している。各学習、各学部で検討している途中であり、児童・生徒につきたい力を十分理解するには至っていない。 ○学部内や学部間で授業を見合う会を行うことで、各学部の学習内容や学習形態について情報交換をすることができた。 ○教科領域部と他分掌(研究・研修部等)が連携し、授業につなげつつあるが、まだ校内全体で理解を深めた取り組みとなっていない。 	C [○]	<ul style="list-style-type: none"> ○年度当初に学校全体の方向性を確認し、分掌としての役割、教科領域部「合わせた指導」としての役割を明確にした上で「つきたい力」「指導の重点」を検討する。 ○研究部、教務部と連携し、(研究授業だけでなく)学部内、学部間の授業を見合う会を積極的に行い、授業実践に生かしていく。

教科・領域部	表現活動	<p>○表現活動に興味関心を持ち、その楽しさや喜びを味わおうとする児童の育成。</p> <p>○自分を表現する気持ちよさを感じ、主体的に自己表現しようとする生徒の育成。</p> <p>○表現活動を様々な場で発揮し、人に認めてもらう経験を積み重ねることによって、自己肯定感を育て、日々を前向きに生きようとする意欲と態度を養う。</p>	B	<p>○各学部で児童生徒のやる気を引き出す教材の工夫をすることで、子どもたちの表現したいという意欲を引き出すことができた。また児童生徒の実態に応じた表現活動に取り組むことで、日々やりがいをもって前向きな態度で生活しようとする生徒も出てきた。</p> <p>○けんべい祭、障がい者アートフェスタ、高等部芸術発表会、学部内発表会など、様々な発表の場を設定し、大きな舞台やたくさんのお客さんの前で発表することで自信が付き、最後までやり抜く力もついてきた。</p>	B	<p>○本校の児童・生徒の表現活動の取り組みについては、小・中学部は学校行事や集会、学部ない発表会等で、高等部はそれに加えて地域に出かけていき、たくさんの方に見てもらえる機会を設ける。</p>
	体力づくり	<p>○各教科、各学部間での体力づくりに関する活動を系統化し、明確にする。</p> <p>○体力維持・向上への意識を高め、各種大会への参加人数を増やす。</p>	C	<p>○体力づくりを意識した年間指導計画の見直しを図り、キャリア発達に応じた課題や目標を検討し、体力づくりの推進計画を設定した。</p> <p>○体育指導に係わる研修会を実施し、普及に努めた。</p> <p>○学校の1つの柱になったことで『体力づくり』に対する教員の意識の向上が見られ、児童・生徒が体を動かす学習を意識して取り入れ、習慣化されてきた。</p>	CO	<p>○体力づくりの推進計画を具体的に活用していくように各教科・領域との連携を図る。</p> <p>○年度当初に、全教員を対象に運動遊びや感覚遊びを中心とした講習会を実施する。</p> <p>○自分で課題を達成できたかがわかるような授業を工夫したり、記録会やスポーツテストや体力づくり生単などを複数回実施したりし、児童生徒に達成状況が伝わる工夫をする。</p>
	自立活動	専門性の向上	<p>○自閉症の特性、あるいは対応する児童・生徒の特性に応じた指導・支援の方法について共通理解を図り、一貫した指導・支援を行うことができる。</p> <p>○行動改善を促すために、行動障がいが見られるケースに対してチームで対応することができる。</p>	C	<p>○外部機関と連携して取り組んだリーダー研修会の指導・助言をまとめ、けんべいサイト等を使って全職員へ情報発信した。また、行動観察表等の記録用紙やストラテジーシート等のツールの様子を電子データで保存し、活用できるように働きかけた。その結果、事例チームの実践を参考にして取り組むケースも増えつつあるが、今後も研修の必要性を感じる。</p> <p>○リーダー研修会を年間を通して計画的に行うことで、リーダーの教員を中心に事例（児童・生徒の問題行動の改善）に取り組む、成果が見られた。特に、事例チームでミーティングを重ねることで、記録のとり方、検討方法等を知り、児童・生徒の不適応行動に適切に対応できる場面が増えている。</p>	CO
研究・研修部	<p>○実態把握をもとに、児童生徒のつきたい力や授業のねらいが明確化、共通理解された授業実践・改善が行われている。</p> <p>○児童生徒が主体的に取り組むために、指導支援の工夫された授業づくりが実践され、児童生徒の変容が確認できる。</p>		C	<p>○各学部で実態把握の方法が工夫され、授業者間で情報交換・共有しながらつきたい力やねらいが話し合われた。研究を進める中で、ねらいがより明確となりそれに伴って指導・支援の方法もより工夫された。APDCAサイクルを活用し、職員同士学び合いながら、客観的な実態把握にもとづく授業づくりを実践することができた。</p> <p>○外部アドバイザーの活用やキャリア教育部との連携によって、キャリア教育の理解が進んだ。「主体的な活動」「役割を果たす」ことが意識され、児童・生徒に目標を意識させる、振り返りの場面の設定、意味づけ・価値づけのある評価の工夫など、キャリア教育の視点を取り入れた授業実践につながられ始めた。「分かりやすい授業」に向けて、さらなる工夫が必要である。</p>	B	<p>○「5つの力」の活用と各種アセスメントの精選や実施時期の検討をする。授業への活用の仕方を検討する。</p> <p>○観点別評価に取り組むことで、さらに目指す姿やねらいを明確にし、指導・支援の工夫を図る。</p> <p>○主体的に学ぶ為に児童生徒自身が分かる、目標設定・確認→活動→振り返り→評価等、「キャリア発達を促す授業づくり」や「分かりやすい授業」の実践を目指す。授業作りチェックシートや児童・生徒の変容から振り返りをする。</p> <p>○互いに学び合えるよう、学部内、他学部の授業への参観を行う。</p>
安全指導部	<p>○日頃から児童生徒の様子や環境の変化に気づき、事故を未然に防ぐための意識を高くもって対応することができる。</p>	C	<p>○1学期に具体的な緊急対応を全体や各学部で研修できたが、年間を通じての注意喚起を計画的に行うことは難しかった。危険だと思われる状況について、即時にヒヤリハット事例として取り上げ、学部内で周知徹底や注意喚起を行うことができた。</p> <p>○各教室に設置している「緊急時対応マニュアル」の内容を改訂した。</p> <p>○食物アレルギー対応食実施日の注意喚起が定着し、事故防止の意識が強化された。</p>	B	<p>○給食、保健、安全など緊急時の対応についての研修を今年度と同様に1学期に設定し、職員全体に周知徹底する機会を作る。特に、起こりやすい事例の概要を提示するとともに年間を通じて、どの時期にどのような注意喚起を行うかについて計画する。</p> <p>○日頃の児童生徒の行動や実態に応じて、事故を予測する意識を高められるように、環境の整備、安全点検の充実を図る。</p>	

総務部	生徒指導	安心して安全な環境	<p>○相談経路を明確にし、相談しやすい組織体制の確立と迅速な対応ができる。</p> <p>○生徒の指導方針について、ケースの実態に応じて学部や校内等で必要な情報の共有、共通理解ができる。</p>	C	<p>○組織的で迅速な対応については、校内サイト等で問題行動や不登校等の相談経路を周知し、実際にその経路に沿って問題解決を図るケースが増えた。</p> <p>○情報共有の充実については、校内サイト等を通じて事案の内容や指導方針の発信を行った。</p>	B	<p>○引き続き相談経路の周知を徹底するとともに、改善ポイントについて教員間で情報交換を行うことでよりスムーズな組織的対応を図っていく。</p> <p>○方針等の根拠を文章等で明示し、対応に当たる教員が情報や根拠を迅速に確認できるようにする。</p>
人権教育部			<p>○教師がつけたい資質・能力を意識して授業を行っている。</p> <p>○教師が児童生徒をさん付けで呼ぶなど、人権を大切にしている行動をとっている。</p> <p>○人権に関する教師の視野や考え方が広がり、授業が工夫されている。</p> <p>○各学部の年計が系統的になっている。また、県米の特色ある取り組みが年計に反映されている。</p>	C	<p>○人権教育全体計画の「つけたい資質・能力」を授業計画書に記載する取り組みに関して、教師の意識の高まりは見られる。しかし、学校全体で年間を通して見ると、定着したとはまだ言えない。</p> <p>○人権感覚を磨く～教師の自己チェックリスト～に2回取り組んだ。自分の行動を振り返るとともに、人権を意識した行動につながりつつある。</p> <p>○職員対象にコンセンサス法のワークショップや鳥取県人権教育基本方針についての研修を行った。コンセンサス法については、職員の話し合いでいかされていたと感じた。研修内容を授業等に生かしたケースもあると思う。</p> <p>○各学部で年間指導計画の見直しを行った。学年や学部での系統性を整えたり、県米の特色ある取り組みを取り入れたり出来た。</p>	B	<p>○授業計画書では、「つけたい資質・能力」が正しく記載されているかをチェックすることは難しかった。次年度は、行事に該当する学習であれば、実施計画書に記載する取り組みが有効だと考える。また、人権教育部からの呼びかけもより一層行っていく。</p> <p>○人権感覚を磨く～教師の自己チェックリスト～を実態に合ったものにするために、今後も項目について見直しながら行う。</p> <p>○研修を計画的に進めていく。終礼等の時間を有効に利用したミニ研修を企画する。また、児童・生徒のニーズや教職員のニーズを取り入れた内容にする。</p> <p>○見直しや変更を加えた年計について、それらが適切なものであるかを実際に使用しながら検証していく。</p>
センター支援部			センター的機能の推進	<p>○外部専門家の専門的知識や技術を学び、日々の指導に生かすことができる。</p> <p>○学部間や担当者が連携を密にして、体験入学を実施する。</p>	C	<p>○外部専門家の活用について、概ね計画的に実施できた。特に今年度は、同じ児童生徒に複数回関わってもらい指導助言を受けたことで、学校での実際の支援に指導助言の内容をより活かすことができた。また、OT、STによる研修会を実施できた。直接関わらなかった教職員に対しても、情報提供をすることができた。</p> <p>○体験入学者を受け入れる学級や授業の関係者に対して、事前の打ち合わせや確認、事後の情報交換などを実施した。これにより、比較的スムーズに受け入れることができ、実施後も情報共有を行うことができた。また、校外の教職員に対して、担任説明会を実施したことにより、体験入学に係る手続きを滞りなく行うことができた。</p>	C [○]

評価基準 A:十分達成(100%~81%) B:概ね達成(80%~61%程度) C:変化の兆し(60%~41%程度) D:まだ不十分(40%~31%程度) E:方策の見直し(30%以下)